

## 「そんな背中」

県立神戸高等学校長  
新谷 浩一

### ○ 蒲公英は落ちたところで花ひらく

放課後、ひとつ楽しみがあります。校長室前の清掃を担当してくれている3年5組の生徒たちが、実に楽しそうに取り組んでくれているのです。また、立ち会う石田先生は清掃担当の生徒と言葉を交わす合間、下校する生徒にも明るく「さようなら」の挨拶をしてくれています。

石田先生と私の出会いは20年近く前に遡ります。とある大学の講義室に、兵庫県の教員採用試験担当が訪れ、『説明会』と銘打った勧誘活動を行う時間がありました。当時、大学生であった石田先生は勧誘される側の席、そしてお話をする側にいたのはどうやら私であったようです。



石田先生はその日の話を鮮明に覚えておられるとのこと。ちょっと背筋が伸びます。ちなみに当時の私はそんなふうにくつもの大学を回らせてもらっていたためか、残念ながら若かりし日の石田先生の記憶はありません。さらに石田先生は付け加えてくれます。「教員として採用されたときの初任者研修の時も、校長先生が全員を前にして蒲公英の話を読まれたの、覚えていますよ」とのこと。新庄先生も私の講話を聴いてくれたとのこと。まだ40代前半の頃ですから、おそらく生意気な話しぶりであったろうと想像すると、気恥ずかしいですね。

思い起こせば、14年ほど国語教員として勤務したのち、20年ものあいだ教育委員会に勤めていたため、不相应なことに人前でマイクを持つ機会が多かったのです。ちなみに教育委員会勤務で得るものがあつたかと言えば、先輩方からは実に多くのことを学びました。そのなかに『挨拶がいかに大切か』との教えもありました。「人間なあ、挨拶が基本や。挨拶の姿勢が悪い人間はその程度の中身でしかないって周囲から見られるんやで。それはつまらんやろ。しっかりと相手の眼を見て、挨拶くらい格好良くシュッとやれ」。

あるいは「県教委で働くとか、校長・教頭として働くとか、それは『絶えず誰かに見られている道』を選んだということや。でも、選んだ以上、『それはできません』とか言っとつたらあかん。頼まれたことはさっと片付け、何をやるにしても『こいつは違うな』そう思われる人間にならんとあかん」とも教わりました。つまり「やるべきことをやるのは当たり前。くわえて常にプラスαを考えよ」という教えです。でも、そもそも教師というのはそういう仕事ですよ。新たな自治会のメンバーも、既にそんな気概に溢れているかもしれません。

石田先生の背中にその気概を見ます。清々しい背中です。また、1校時の授業が始まろうとするなか廊下に立ち、生徒たちに「おはよう」と「急がなあかんで」の声掛けをする澁川先生の背中も見ます。その話をするとき澁川先生は「いや、1校時に授業がなく、時間があるときだけです。こういうことが大事だって伝えたんでね…」と話されます。また、考査中の放課後、ホームルーム教室を箒でひとり掃いている潮海先生の背中を見かけたこともあります。「きれいな環境で試験に挑ませたい」という担任としての思いですね。

「明確に与えられた役割さえ、きちんとこなしたらいい」という命題は真です。でも、「役割はなくとも、必要性に気づいた誰かがプラスαに取り組めば、世の中はより美しいものになる」という命題もおそらく真です。そのプラスαを追い求めるよう躰けられてきたせいですかね。2人の背中も私には実に清々しいものです。

『蒲公英の綿毛はいったん空に放たれるとあとは風任せで、例えばアスファルトの上に落ちるかもしれません。なぜその地に落ちたのか、自分には解りません。でも、その場所で根を張らなければ新たな生を始めることはできません。だから、風や雨に頼りながら割れ目に転がり込み、そこで根を張り、蒲公英は花を咲かせます。皆さんが蒲公英のようにそれぞれの学校で根を張り、花を咲かせてくれたら嬉しいですね』

かつて様々な場面で話していた蒲公英の話、今更ながら思い出します。私は「教える」ことに加え、生徒に「魅せる」ことも望んでいたかもしれません。『そんな背中』という花を。

